



安善小路の黒塀(新潟県村上市)

市民の心が紡ぎ出す 黒塀と町屋の佇まい —— 越後の北の城下町「村上」

大桃 美代子
おおもも みよこ
タレント



ニュース番組をはじめ、料理、クイズ、バラエティ、情報と幅広い分野で司会として活躍。2004年の中越地震を新潟県魚沼市の実家に帰省中に被災。2005年に「魚沼特使」に任命され復興のために活動。雑穀アドバイザー、野菜ソムリエ等の資格を取得するなど食育や農業に関心をもち、現在、古代米(桃米)作りに挑戦中。ブログ「桃の種」 <http://ameblo.jp/momo-tane/>

私がまちづくりに関心を持つようになったのは、2004年に起きた『新潟県中越地震』で被災したのがきっかけでした。ふるさとの復興を全国の人に忘れてほしくないと、地元魚沼でお米づくりをやるようになりました。古くから北の要所として栄えてきた新潟には、いまでも歴史情緒のある素敵な場所が数多く残っています。そのひとつが県の北端にある内藤家の城下町「村上」です。ここは、武家町、町人町、寺町そしてお城跡という城下町の要素がすべて残っている私の大好きな町ですが、十数年前に道路拡幅による近代化計画が持ち上がったのです。近代化計画によって多くの歴史的な町が個性を失い、衰退するのを見ていた村上の商店主たちは、この危機に立ちあがりました。

「外観はもとより、豪快な吹き抜け、太い梁、大黒柱、囲炉裏など内部に至るまで、昔そのままの姿がいまも健在な町屋こそが町の宝ではないのか」。伝統的な町屋の価値を見直し、まちづくり資源として活用しようとして、町屋の代表格である、創業120年「味匠喜つ川」の若主人の呼びかけで、1998年、「村上町屋商人会」が結成されました。まず手始めに「城下町村上絵図」を作り、22軒の町屋を常時公開しました。すると絵図を片手に歩く人が増えはじめたのですね。

2000年春からは各商家所蔵の雛人形を店の間に陳列した「町屋の人形さま巡り」を開催。その後も所蔵の屏風を飾る「町屋の屏風まつり」や、4000本の竹に蠟燭を灯す「宵の竹灯籠まつり」など、村上ならではの新しい催しを次々に行い、町は一層賑わうようになったのです。

私がとくに感心したのは、2002年からの「黒塀プロジェクト」です。これは昔ながらの黒板塀でまちなまの景観を取り戻そうと、現在のブロック塀をそのままに、表面に木の板を打ち付け、柿渋で黒く塗るという大変簡便な修復なのですが、「黒塀一枚1000円運動」と銘打ち、資金づくりも人手の活用も市民自ら取り組んだのです。私もこの「安善小路」を歩きました。城下町村上の佇まいが見事に甦ったように思えました。

日本は明治以来、脱亜入欧が唱えられ、「洋」の文化こそ良しとし、戦後それに一層拍車がかかりましたが、いまようやく「和」の文化への再評価がはじまっています。この村上は伝統の和の文化の姿と価値を、その町に暮らす市民が自らの知恵と行動で育てていくという、まちづくりの基本を、私たちに思い起こさせてくれます。

(談)



右:味匠 喜つ川(新潟県村上市)
左:軒先に吊るされた塩引き鮭
絵:平野 敬則